Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

イスラームの聖地エルサレムの形成

岡本，恵

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2013-09-25
(Date of Publication)
2014-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第5989号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005989

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目　　**（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）**

イスラームの聖地エルサレムの形成

氏　　名　：　岡本　恵

神戸大学大学院文化学研究科社会文化専攻（博士課程）

指導教員氏名	（主）	伊藤　隆郎	准教授
	（副）	緒形　康	教授
	（副）	大津留　厚	教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本稿は、エルサレム史研究史料としてのファダーイル・バイト・アルマクディス Faḍā'il Bayt al-Maqdis （以下 FBM と略称）という作品ジャンルに注目し、FBM 編纂の動機・目的やその背後にあった社会状況を明らかにし、前近代シリアにおいて聖地としてのエルサレムの重要性が確立されていく過程を提示することを目指すものである。

序章では従来の FBM 先行研究の流れを明らかにし、それが主に起源論研究に終始しており、FBM 写本の現存状況が明らかになっているにも関わらず、研究者たちは比較的初期に成立した作品にしか注目してこなかったという問題を指摘した。このため実際に FBM 編纂が盛んになったアイユーブ朝末期以降の作品については議論が進んでおらず、FBM の起源やその編纂目的を、シリアに権力基盤をおいたウマイヤ朝と、十字軍勢力からのエルサレム奪還というジハードを掲げていたシリアのムスリム政権による政治的プロパガンダと結び付けるという、固定された視点から脱却できずにいた。本稿ではこの問題点に立脚し、より新しい時代に編纂された作品までを含めた FBM 作品群全体を考察の対象としている。

第 1 章では、先行研究による FBM 写本研究を参考に、本稿で考察の対象とする FBM 作品を定めた。本稿では先行研究の問題点を踏まえ、2/8 世紀から 12/18 世紀初頭にまでの期間に編纂された作品のうち、写本が現存しその著者が明らかになっている作品であり、かつ内容の面からも、「エルサレムという都市やその周辺地域を直接の対象とし、その美点を讃美することに主題を置いた作品」という、本稿における FBM の定義にかなう 17 作品を考察の対象とした。また FBM 作品群で扱われる伝承・記述の内容を確認し、A. エルサレムの歴史（イスラーム以前）、B. エルサレムの歴史（イスラーム時代）、C. エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承、D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承、E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚、F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承、G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記、H. クルアーン解釈、I. その他（エルサレム以外に関するファダーイル）の 9 つのカテゴリーに分類した。

第 2 章では、5/11 世紀ファーティマ朝時代から 7/13 世紀マムルーク朝初頭にかけての時期に編纂された 7 つの FBM を取り上げた。FBM は元来エルサレムに関するハディース集から派生してきたジャンルであり、この時代に編纂された作品にはイスナードの明記や口伝による伝承収集などの、ハディース集としての性格が強く残っていた。本稿ではこの時期に編纂された作品を「ハディース集型 FBM」と呼ぶ。これらの 7 作品に含まれる伝承を先の 9 つのカテゴリーに分類して、作品ごとにそのパーセンテージを確認したところ、エルサレムを扱った伝承に関しては各作品とも概して A、B、C の割合が多く、これらの要素がハディース型 FBM の主要素になっていた。しかしファダーイル・アッシャーム等のその他の場所に関する伝承まで含め作品全体の構成を見た場合には、伝承の取捨選択に特定の傾向を見出すことはできず、この時代の FBM 編纂に明確な定型はなかったことがわかる。この中にウマイヤ朝時代や、十字軍がエルサレムを占領していた時代に編纂された作品は知られていないことから、FBM 編纂

がこれらの時代に盛んであったとする先行研究の主張は、史料状況からは否定できる。十字軍時代の前後で作品の編纂スタイルが大きく変化しているということもなく、この時期の FBM 編纂には当時のエルサレム周辺の政治・社会状況はあまり反映されていない。

第 3 章では、8/14-9/15 世紀のマムルーク朝時代の 6 作品を取り上げた。この時代には FBM 編纂スタイルは大きく変化し、従来のハディース型 FBM から、あるテーマのもとに伝承を取捨選択・再構成したり、また新しい要素を追加したりといったことが見られた。マムルーク朝時代に、FBM は「参詣記型」と「地誌型」という 2 つの方向性に展開する。参詣記型 FBM とは、エルサレム参詣を前提として編纂され、エルサレム参詣案内書の性格を持つ作品であり、これらの作品ではハディース型 FBM に取り上げられた伝承の中から、エルサレム参詣やヘブロン参詣に関係する部分のみが抜き出されて、参詣者への便を優先した形で再構成されている。

また地誌型 FBM では、既存の FBM だけではなくハディース集、伝記集、地理書などの様々な書物から、エルサレムに関するより広範な知識を取り入れて編纂しようとする試みが見られる。地誌型 FBM の大きな特徴は、シリア地域の地理的情報とエルサレムに縁の偉人たちの伝記という、ハディース型 FBM には見られなかった 2 つの新しい要素が追加されている点にある。マムルーク朝末期には、天地創造から著者の同時代までのエルサレムの歴史、エルサレムとその周辺の村に存在する宗教施設を中心とした詳細な地理情報、同地域で活動したスンナ派 4 法学派の歴代のウラマーまでを網羅した伝記集を含む、エルサレムに関する情報を総合した作品も編纂されている。

第 4 章では、10/16-12/18 世紀のオスマン朝時代に編纂された 4 つの FBM を取り上げた。この時代に編纂された FBM には、作品中で当時のオスマン朝スルタンや、エルサレム県知事といった為政者たちの名前が言及され、彼らに対して作品が捧げられるといった新しい傾向が見られた。これは、当時のエルサレムを取り巻く政治・社会情勢が不安定であり、同時に経済基盤も脆弱であったことから、現地の知識人が宗教施設をはじめとするインフラを管理し自身の立場を守るためには、中央政府の意向に依存せざるを得なかったことに基づいている。この時代の FBM 編纂には、オスマン朝為政者がエルサレムで行った事業を宗教的善行として讃美することにより、彼らからより多くの貢献を引き出そうとする意図が見られる。

またこの時代の FBM に見られるもうひとつの特徴としてはスーフィズムの強い影響を挙げることができ、それはとりわけ聖者廟参詣という形で表されていた。作品中では、伝統的な参詣場所であるハラム・シャリーフやヘブロンのアブラハムのモスク以外にも、数々の預言者や聖者たちの墓廟についての記述があり、それらの当時の様子や人々がそこで体験した奇跡に関する逸話が豊富に挙げられていた。このことからは、当時のエルサレム周辺地域においてより小規模で身近な聖所が作り出されて、そうした場所への人々の参詣が一般化していたこと、さらに FBM がそれらの参詣を推奨していたことが指摘できる。

終章では第 2 章から第 4 章にかけて時代ごとに考察してきた FBM 編纂を総括した。まず

FBM 編纂者については、彼らの出身地、活動した地域については、時代を通じてエルサレム、ダマスカスの 2 都市に代表されるシリア地域に集中していることが確認された。彼らの大部分はエルサレムかダマスカスの出身者であり、ダマスカスのアサーキル家に代表される、2 都市の高名な学者の家系に連なる人々と、彼らが中心となって運営するウラマーのサークルが、エルサレムに関する伝承の継承と FBM 編纂に大きな役割を果たしている。シリア出身ではない編纂者の場合そのほとんどがエジプトの出身者であり、FBM 編纂は一般的にこれらの地域でのみ行われていた地域的な活動であったと言える。このことは、エルサレムがこの地域においてとりわけ重要視されていたことを示すものであり、聖地としてのエルサレムの地域性をも示唆するものである。

イスラームにおけるエルサレムの聖性は初期の時代に認識され、エルサレム自体もカリフ＝ウマルの時代にはムスリムの支配下に入ったものの、その重要性が本格的に確立されるようになるのは、サラーフ・アッディーンによるエルサレム回復以降のことであると考えられる。そのことは FBM が編纂されてきた年代と、その内容の 2 つの面から判断できる。

FBM の編纂が実際に始まったのは 2/8 世紀末から 3/9 世紀初頭にかけてのことであるが、当時のエルサレムは依然ユダヤ教・キリスト教の影響の強い都市であった。また十字軍によりエルサレムが占領されキリスト教徒の都市となっていた約 90 年の間、ウラマーはエルサレムから距離を取っており、FBM の編纂も完全に中断している。FBM 編纂はサラーフ・アッディーンの征服以降再開され、アイユーブ朝からマムルーク朝にかけて最も盛んになるが、そうした時期は、エルサレムがムスリム勢力によって再びイスラーム化され、マドラサをはじめとする多くの宗教施設と多数のムスリム知識人を擁する学術センターなっていく過程に同調するものである。エルサレムは十字軍勢力から回復された後、こうした再イスラーム化の過程において、以前には存在しなかった「イスラームの聖地」としての強固なアイデンティティーを確立していったのである。

アイユーブ朝からマムルーク朝にかけては FBM の内容面でも大きな変化が見られた時期であり、その点からもこの時期ムスリムたちの間でエルサレムに対する意識が変わってきたことがわかる。この時代に編纂された作品にはエルサレム参詣に対する興味が示される他、作品がイスラーム的性格を強く示すようになり、それと反比例する形でユダヤ教・キリスト教的色彩の強い伝承が作品内において占める割合が減少してくるという傾向が見られる。初期の FBM 編纂者たちがユダヤ教・キリスト教より取り入れたエルサレムのイメージに依存していたのに対し、後代の編集者はそうしたイメージにイスラーム独自の解釈を加えて再構成し、ムスリムの都市としての現在のエルサレムの栄光を讃美しようとしている。これらの点より FBM 編纂の歴史は、前近代シリアのウラマーたちがイスラームの聖地としてのエルサレムの姿を作り上げていくための、学術的努力を反映するものであると言える。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	岡本　恵
論　文　題　目	イスラームの聖地エルサレムの形成

要　　旨

本論文は、ユダヤ教、キリスト教、イスラームという３つの一神教の聖地であるエルサレムの美点や魅力に関するファダーイル・バイト・アルマクディスと呼ばれる文献群を取り上げ、その編纂の動機や目的、背後にあった社会状況を明らかにしようとするものである。

序章は、先行研究を整理し、それらの問題点を指摘する。イスラーム世界では、エルサレムなどの都市や聖地、正統カリフをはじめとする特定の個人、コーランなど、さまざまなテーマについての伝承をまとめ、賛美するファダーイルの書が数多く著された。これらファダーイルの書のうち、エルサレムに関するファダーイル・バイト・アルマクディス（エルサレム賛美文献）については比較的多くの研究がなされている。しかしながら、エルサレム賛美文献の中で、これまでに論じられてきたのは主に初期の作品である。また、これらの作品の編纂目的が、しばしば安易に同時代の政治的状況に結びつけて考えられている。このような問題点を踏まえ、本論文の執筆者は、18 世紀までに書かれた、現存するアラビア語のエルサレム賛美文献諸作品を渉猟し、以下でそれらの内容を詳しく検討する。

第 1 章では、検討対象の範囲が確定されるとともに、エルサレム賛美文献の内容が概観される。エルサレム賛美文献の題名と著者名を網羅しようとする先行研究はあるが、エルサレム賛美文献とは見なし難い作品も含めているなどの問題がある。そこで本論文執筆者は、8 世紀から 18 世紀初頭までに著された作品のうち、写本が現存し、著者が明らかになっているものを調査し、エルサレムやその周辺地域を主なテーマとする作品を選び出して、それらを検討対象とする。続いて、それらの内容をイスラーム勃興以前のエルサレム史、その後のエルサレム史、エルサレムの神聖性に関する伝承など９つの要素（カテゴリー）に分類し、各要素について紹介する。

第２章では、現存する最古の作品が著された 11 世紀から 13 世紀初頭までの作品について論じる。この時期に編纂されたものには伝承経路の明記や口伝による伝承収集などの、ハディース集としての性格が強く残っている。そのため、これらを「ハディース集型」と呼ぶことができる。ただし、「ハディース集型」作品の内容を分析すると、エルサレムの歴史およびエルサレムの魅力に関する伝承が主要素ではあるものの、伝承の取捨選択に特定の傾向を見出すことはできず、この時期のエルサレム賛美文献に明確な定型は見出せないという。

また、ウマイヤ朝時代、および十字軍がエルサレムを占領していた時代に著された作品は知られておらず、十字軍時代の前後で作品の編纂スタイルに大きな変化も認められない。したがって、シリアを拠点とするウマイヤ朝、あるいは十字軍からのエルサレム奪還を目指してジハードを唱導したムスリム政権による政治的プロパガンダの一環として、特にこれらの時代にエルサレム賛美文献が盛んに著されたという先行研究の見解は修正されるべきであるとする。

第３章は、14-15 世紀の作品を検討する。この時期にエルサレム賛美文献は、その編纂スタイルが大きく変化し、あるテーマのもとに伝承を取捨選択・再構成したり、新しい要素を追加したりするようになり、「ハディース集型」から「参詣記型」と「地誌型」という２つの方向に展開するという。「参詣記型」とは、エルサレム参詣案内書の性格を持つ作品である。これらの作品では、「ハディース集型」に収録された伝承の中から、エルサレムや近隣のヘブロンを参詣する際の作法に関係する部分のみが抜き出されて、参詣者への便を優先した形で再構成されている。一方「地誌型」では、既存のエルサレム賛美文献だけではなく、ハディース集、伝記集、地理書などのさまざまな文献から、エルサレムに関する広範な情報を取り入れて編纂しようとする試みがなされている。「地誌型」の大きな特徴は、このように、シリアの地理的情報とエルサレムに縁ある偉人たちの伝記という、「ハディース集型」にはなかった２つの新しい要素を含んでいることである。

第４章は、16-18 世紀（オスマン朝時代）に著された作品が取り上げられる。それらに見られる新しい傾向は、オスマン朝君主やエルサレム県知事といった為政者たちが称揚されていることであり、中には彼らに献呈されたものもあった。本論文執筆者は、このことを、当時エルサレムの政治・社会情勢が不安定であり、経済基盤も脆弱であったことと関係づける。すなわち、そのような状況にあって、オスマン朝の為政者たちがエルサレムで行った事業を宗教的善行として賛美することにより、彼らからより多くの貢献を引き出そうとする意図をもってこれらの作品が書かれたのではないかと推測するのである。この時期の作品のもうひとつの特徴は、聖者廟参詣に関する説明の占める割合が大きくなることである。伝統的な参詣場所であるハラム・シャリーフやヘブロンのアブラハムのモスク以外にも、数々の預言者や聖者たちの墓廟について記述され、またそこで体験した奇跡に関する逸話が豊富に挙げられている。

終章は、まず第１章から第４章までの検討結果を章ごとにまとめ、次に通史的な観点から考察を加える。著者たちの出身地、活動した地域については、時代を通じてエルサレム、ダマスクスの２都市に代表されるシリアに集中していた。中でもダマスクスのアサーキル家に代表される２都市の高名な学者の家系に連なる人々と、彼らが中心となって運営するウラマーのサークルが大きな役割を果たしていた。また、シリア出身ではない著者のほとんどはエジプトの出身であった。したがって、エルサレム賛美文献の編纂は概ねこれらの地域でのみ行われていた局地的な活動だったといえる。また、初期の著者たちはユダヤ教・キリスト教から取り入れたエルサレムのイメージに大きく依存していたが、12 世紀末にエルサレムが十字軍から奪還され、以後そこにマドラサなど多くの宗教・教育施設が建てられ、多数のムスリム知識人が集うようになると、エルサレム賛美文献もイスラーム的性格を強めていったことが確認される。

なお、エルサレム賛美文献のひとつ、ルカイミーによって 1731-32 年に著された『エルサレムとヘブロンの至宝に関する栄光ある喜びの妙句』のケンブリッジ大学図書館所蔵写本とベルリン州立図書館所蔵写本の２点に基づくアラビア語校訂テクストと日本語訳注が、資料編として付けられている。

このように本論文は、エルサレム賛美文献という、重要でありながら従来さほど注目されてこず、その多くが未公刊の手写本のまま残されているアラビア語の文献群を調査して、先行研究の誤りを修正し、このジャンルの時代による変遷をはじめて明らかにしている。ただし、他都市・地域に関するファダーイルの書や、地方史や地誌など他ジャンルの文献との比較など、より広い視野からの検討がなされるべきであったし、考察が不十分な箇所も少なくない。しかし、それでもなお、エルサレム賛美文献に正面から取り組んだ試みとして、本論文の研究史上の意義は小さくないといえるであろう。

以上にもとづき、本審査委員会は、論文提出者である岡本恵が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

主査記載 氏名・印	緒形　康　　印

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	緒形　康	副　査	准教授	真下　裕之
副　査	教授	大津留　厚　　印	副　査	准教授	村井　恭子
副　査	教授	三浦　徹　　印	副　査	准教授	伊藤　隆郎　　印